

第9章 谷口の苦悩

青葉学院との事実上の日本一を決める試合に勝利した墨谷二中。卒業を間近に控えたキャプテンの谷口にはもうひとつの大きな仕事があった。それは新キャプテンを誰にするかであった。

9・1 野球部の部室

丸井「さっ、キャプテン。袖を通してください。」

谷口「もう大丈夫だよ、丸井。着がえを手伝ってくれなくても…」

丸井「いいスから、いいスから。」

谷口「もうすぐ、包帯が取れるんだ。」

丸井「よかったでスね。」

青葉戦で右手人差し指を骨折した谷口であったが、その傷もあとわずかで完治する予定であった。

部室から出ると次期キャプテンについての取材で待ち受けていた新聞部につかまってしまった。

新聞部「谷口さん、新聞部ですが次期キャプテンは決まりましたか？」

谷口「いや、まだ…」

新聞部「まだですか、他の部ではもうとっくに決まっているんですけど…」

谷口「もう少し待ってくださいないか。」

新聞部「あのううわさではイガラシ君が最有力候補だと言われているんですけど…」

丸井「しつこいぞうおまえら。わが野球部は他の部とは違うんだぞ。なにしろ日本一の栄光を引き継ぐんだからな。キャプテンとしては慎重になっておられるんだあ。いい。」

新聞部「あゝあ…」

丸井が新聞部にわって入って、谷口はほっと胸をなで下ろしグラウンドに向かって歩き続けた。

丸井「キャプテン、おれもやっぱり次期キャプテンはイガラシがいいと思うんですけどね…」

谷口「どうしてだ？」

丸井「あいつ、一番野球知っていますからね。キャプテンになるからにはよく野球を知ってなければダメですからね。」

谷口「みんなどう思っているんだ？」

丸井「みんなも同じ意見じゃないスかね。」

練習が終わったの帰り道、谷口はまだキャプテンをどうしようか悩んでいた。学年が下のイガラシをキャプテンに決めてしまっているのか…

9・2 病院の待合室

谷口の指に巻かれた包帯がようやく取れる日がやってきた。

看護婦「谷口さん。谷口さん。」

谷口「はっ、はい。」

包帯が取られ、谷口は自分の指を見つめている。

谷口「せ、先生。指が…」

医者「うむ。まっしばらくマッサージに通えばもう少し動くようになるだろう。」

谷口「もう少し…?」

医者「まっ日常生活にはさして支障はないじやろう。」

谷口「そ、それじゃ、野球は?」

医者「そりや無理じゃな。」

谷口「む、無理ってずっとですか?」

医者「ああ、そうだ。」

谷口「そ、そんな…」

医者「どうしてこんなになるまで、酷使したのかねえ。」

病院を出た谷口は医者から言われた言葉が頭から離れなかった。もう野球ができない…。家までの帰り道、谷口の頭には今までの墨谷二中での出来事が浮かんでは消えていった。

父「どうしたんだ、タカオ?」

谷口は今日医者から言われたことを父に話した。話し終えた谷口はそのまま自分の部屋に入って行った。

母「そうだったのかい、かわいそうに。」

父「なあんでい、母ちゃんまで。」

タカオが野球ができないことを父から知らされた母は涙を流していた。

母「だって、高校に行っても野球をやるんだとはりきっていたのに。」

父「タカオは精一杯やったんだ。悔いを残しちゃならねえのよ。そうでなけりや、指と優勝をひきかえにした意味がねえやな。タカオうつ、いつまでメソメソしてやんでえ、野球ばかりが人生じゃねえや。」

谷口の父はタカオの部屋のドアを開けて、机の前にすわっているタカオに向かってしゃべり始めた。

父「ばかやろう。てめえそれでもキャプテンか。おめえにはまだ最後の仕事が残ってんだぞ。新キャプテンを選ぶのはどうしたんだ。えっ、最後のけじめもちゃんとしねえで、なんだメソメソしやがって。おめえ、それでも男かい。」

谷口「わ、わかったよ、父ちゃん。」

父「わかったら、立派にちゃんとキャプテンのけじめを果たしやがれ。」

谷口「おれ、ちゃんと最後の責任を果たすよ。」

父「それが、男ってもんよ。」

母「と、父ちゃん。」

9・3 野球部部室

3年生部員が部室に集まって次期キャプテンについての話し合いが行われた。

中村「おれは、次期キャプテンはイガラシでいいと思う。」

松下「しかし、あいつじゃみんながついてこないとおもうな。」

遠藤「だけど、あいつ野球のセンスはいいからなあ。」

松下「それはおれも認めるけど、キャプテンとしてはどうかな。おれは加藤の方が良いと思うけど…」

中村「キャプテンはどう思います。」

谷口「その前に他のみんなはどう思う。」

鈴木「下級生のキャプテンなんて前例がありませんからねえ。」

須藤「前例は抜きだよ、イガラシが一年生の最初からレギュラーになったのだった、前例にはなかったことだからねえ。」

鈴木「おれは高木をおすな。」

南「高木なら西田の方が良いよ。」

須藤「島田だってやれないことはないぜ。」

中村「こんなところですけどねえ。キャプテン。」

谷口「うむ。」

松下「最終的にはキャプテンの決めることです。我々はキャプテンにしたがいますよ。」
中村「で、キャプテンは誰を？」
谷口「もう少し、考えさせてくれないか。」

9・4 練習を終わっての帰り道

練習を終えたイガラシが帰り道を歩いている。そこに丸井が：

丸井「おーい、イガラシー。」
イガラシ「なんですか。」
丸井「おまえの野球のセンスはあいかわらずいいな。でもさ、もっとみんなから好かれるようにならんかな。」
イガラシ「どうしてですか。」
丸井「えっ、どうしてって、それじゃキャプテンが務まらねえじゃないか。なあ。」
イガラシ「誰がおれをキャプテンだなんて言っただんですか。」
丸井「イガラシを置いて、他にキャプテンになるやつはいないじゃないか、だろう。」
イガラシ「だって、他にいくらでもいるじゃないですか。」
丸井「てめえ、おれが親切に教えてりや。」
イガラシ「いらぬ、おせっかいですよ。」
丸井「な、なんだと。」
イガラシ「丸井さんこそ、そのすぐカツとなるくせを直した方が良いでしょう。」
丸井「えっ。て、てめえ、このやろ、ばかやろ。ラッキョ、猿、ちくしよ。」

9・5 谷口の家で

谷口「ふっ。」
父「ていへんだなあ、キャプテンを選ぶのも…。」
谷口「ああ。」
母「でも、もう候補はいるんだろ。」
谷口「候補だったら、みんなそうだよ。」
父「そんなことはあるめえ、タカオ。みんなをひっぱっていくのは、誰でもできるともんじゃないやねえぞ。」
母「そうだよ。」
谷口「でも、おれがやれたんだから。」
父「おめえはよくやったよ、父ちゃんなんか腕が良くてもよお、大工の棟梁としてみんなをひっぱっていくのは苦手だしな。」
谷口「腕が良くても…」
父「そうよ、いくら技術が良くなったって人の上に立つのは別よ。」
谷口「いくら技術が良くってもか…。」

その時、玄関のドアが開いた。

丸井「こんばんは。」
谷口「やあ、丸井。」
丸井「キャプテン、もう神社で練習しないんすか。」
谷口「えっ……。」
丸井「なぜですか。」
谷口「……………」
丸井「なぜですかあ！ 卒業しちゃうから、もう関係ないっていうんすか。おれはどんな時でも一生懸命かばで努力する、キャプテンを尊敬していたんですよ。それなのに、おれはキャプテンをみそこないましたよ。」
谷口「丸井…。」
父「丸井さんよ、タカオは練習したくても、もうできねえんだよ。」
丸井「えっ…。」
母「と、父ちゃん。」
父「タカオの指はな、使い物になんねえのよ。」
丸井「えっ、キャ、キャプテン。」

谷口「ああ…。」

丸井「そうだったんすか、そ、それを知らねえでおれは…。」

谷口「丸井、おれはもうだめなんだ。」

丸井「キャ、キャプテン。」

谷口は言い終わると、こらえきれず背中を丸井に向けた。

丸井「なんでえ、なんでえ、キャプテンらしくもない、右手がダメなら、左手があるじゃないスか。おれだって、何度野球をやめようと思ったか知れないスよ。で、でも一生懸命努力すればやれるんだって、教えてくれたのはキャプテンじゃないスか、そ、そのキャプテンが弱音なんかはいちまって…。」

谷口「ま、丸井。」

振り返った谷口の目には涙があふれていた。

丸井「すいません。」

谷口「丸井。神社に行こう。」

丸井「ええっ。」

谷口「一緒に、練習をつきあってくれないか。」

丸井「ええっ、キャ、キャプテン。や、やりましょう。キャプテン。」

二人は野球の道具を持って御岳神社に向かった。

神社に着いた二人はさっそくキャッチボールを始めた。

谷口「いくぞっ、丸井。」

丸井「は、はい。」

谷口「それっ。」

けがが治ったにもかかわらず人差し指が使えない谷口の投げたボールは、山なりのボールとなり丸井の手前で落ちた。丸井はそのボールを見て谷口のけがの深刻さを知り、思わず涙がこぼれ落ちた。

谷口「泣くな！ 丸井。野球部を頼むぞ！ 次期キャプテンとしてな。」

丸井「え、ええっ…？。」

谷口「おれに、やる気を起こさせてくれたその気持ちで、みんなを引っ張って行ってくれ。」

丸井「キャ、キャプテン、おれなんかとても…。」

イガラシ「お願いしますよ、丸井さん。」

谷口「イガラシ…。」

イガラシ「キャプテンの家にいったらこっちだと…。」

丸井「イガラシ、どうしてキャプテンの所に行ったんだ。」

イガラシ「次期キャプテンは丸井さんが良いんじゃないかと、一言、言いに。」

丸井「て、てめえ、すぎたまねをしやがって…。」

谷口「イガラシ、丸井を頼むぞ。」

イガラシ「まっ、しかたないですな。」

丸井「えっ、しかたないたあ、なんだ、しかたないたあ…。」

谷口「丸井。」

丸井「は、はい。」

谷口「野球部を頼むぞ。」

イガラシ「丸井さん、キャプテンお願いします。」

丸井「は、はい。」

こうして次期キャプテンは丸井に決まった。

（原作 ちばあきお「キャプテン」 文 小澤茂昌）